

アフリカ、アジア、南北アメリカなどの順に解説をした構成面での科学性の高さなどが後世に認められた結果である。

また、この書物は「序」に「正徳三年」（1713年）と記されていることから、この年を成立年とする考えと、もう一つは白石の没する前数日前の享保10（1725）年に書き上げられたとされる説がある。いずれにしても版行は明治14（1881）年まで行われなかった。その間、幕府所蔵本や白石門下の弟子たちが所蔵した本を基にした、所謂「写本」として流布し、後世の幕府要人や知識人が海外情勢を知るための必携の書となったのである。しかし、その中には粗悪な写本も多く、享和2（1802）年には山村昌永が数本の写本を集めて誤りを正したうえ、和漢洋書102種を翻訳、編纂し、『訂正増訳采覧異言』として世に出している。



山村昌永撰『訂正増訳采覧異言』全14巻 文化1（1804）年 写本
（本学図書館所蔵）

シドットティの態度と幕府の処罰

シドットティは白石と接する中でキリスト教聖職者としての自律的な態度を維持しつつ、日本や日本人を称えていたと言われている。また彼は、わずか4回の対面であっても儒学者である白石に信頼感を抱いていたものと想像せずにはおれない。なぜならば、彼はローマで16人の師から諸学を学んだ博学の人物とされ、知識人を敬う気質を備えていたとしても不思議ではないからである。こうしたことから白石にも正しい海外情報を整然と語り、白石もそれを的確に捉えて冷静な分析を加えたものと考えられる。

このように、当時の日本人が注目する海外情報をもたらしたシドットティであるが、法王の親書を持参していないことから正式な使節として

認めるか否かが幕閣の意見の分かれたところとされる。しかし、白石が主張した信使としての扱いが妥当と認められ、さらに処罰についても白石が個人的な感情ではなく、彼がこの後の政策にも度々示した儒学の根本理念としての「仁」、すなわち「思いやり」の心を判断基準にしたと思われ、前例として残っていた「誅殺」を覆して進言した三つの案（上策は本国送還、中策は拘禁、下策は誅殺）の中で、中策としての拘禁の継続が採用されシドットティの一命は助けられた。しかし、彼は日本上陸4年後の1714（正徳4）年に拘束されたまま46歳で生涯を閉じた。

白石の政策提言と蘭学発展の基礎

一方、白石は家宣と家継の2代の将軍に仕え、「生類憐れみの令」の廃止を提言すると共に、社会の安定を背景に仁政を基にした「正徳の治」と呼ばれる改革を推し進めた。この中には、貨幣の質を高めるための改鋳や、シドットティの尋問から得た海外認識による長崎貿易での金銀流出規制など、財政面の立て直し策がある。

また、白石は武士を束ねる法律である「武家諸法度」を改めて「武」重視の内容に「文」の要素を取り入れ、「文武両道」への移行も行っている。特に、この改正は後の蘭学解禁によって、各地の大名自らが蘭学研究を行い、さらにその振興を図った、所謂「蘭癖大名」の出現を促すことになり、江戸時代中期以降の科学・技術や産業の発展へと繋がっていった。

こうした白石も享保1（1716）年に吉宗が8代将軍に就任するにあたって、その職を解かれた。この後、吉宗は蘭学の解禁を決定したが、その蘭学は皮肉なことに罷免した白石がシドットティから得ていた海外知識や、白石が提言した政策が要素となって発展したことから、大槻玄沢のように白石を「蘭学の草創者」と仰ぐ声もある。

新井白石は『折たく柴の記』をはじめ、生涯を通じて多くの著作を残したが、『采覧異言』に見られるように、自らの専門分野を大きく越えた研究を行い、「江戸時代を通じて最大の学者」とも称される地位を築いたのである。

おく まさよし(司書・図書館事務長兼管理運営課長)